

Title	餘戸について
Sub Title	On Amaribe (餘戸)
Author	村山, 光一 (Murayama, Koichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1958
Jtitle	史学 Vol.31, No.1/2/3/4 (1958. 10) ,p.338- 364
JaLC DOI	
Abstract	The word "Amaribe" means the surplus number of families. It was; fixed after the Taika Restoration (645) that fifty families should form a Sato under the newly established village system. As it was only a formal method of allocation, there remained some number of families which were not included in the Sato 里. These families were called "Amaribe" or surplus families. There is no question about the. Amaribe system itself. The question is how and under what circumstances it was established. In this respect, there have been various opinions among our historians. However, no authentic study of actual conditions of the system has been introduced until now. This was because reliable material was scarce and because the Ryo (Code) 令, which was the basic law of the period in question lacked the provisions concerning the Amaribe. Many of our historians accepted the description of the "Ryo-no-Gige" or the Interpretation of the Code, promulgated in 834, that in the case of a large village consisting of more than 60 families, more than 10 families out of the whole number of the families in the village formed an Amaribe. However, the writer of this article could hardly support such as opinion in theory and in practice. The writer, after inquiring into the number of the Amaribe and the places where the Amaribe were established, found the fact that even in a Kori 郡 (a county under the administrative section of those days) there was only one Amaribe and that where Amaribe were established were the county limits, seaside districts and remote places in the mountains. From the aforesaid facts, the writer has attempted to prove that when the families were allocated according to the system under which it was fixed that 50 families in a Kori should form a Sato, the odd number formed an Amaribe. Furthermore, the writer has attempted to comment on the actual condition of the Amaribe to prove that it was by no means a medley of families and that in some cases an Amaribe included some organized villages.
Notes	慶應義塾創立百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19581000-0342

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

餘戸について

村 山 光 一

はしがき

律令國家創立期における地方政治については興味ある問題が多い。例えば當時の村落制度である五十戸一里制の採用がそれである。この制度は既に何らかの自然村落を形成していた農民に對して、國家が新に全く別個の次元に立つて五十戸毎に「里」を設定し、彼等に國家的統制のわくをはめこんでいったということであつて、その爲に彼等自身の生活様式もいきおい變化を余儀なくされ、從來の多分に共同體的な生活は大影響をこうむり、新しい政治的社會の中にまきこまれてゆくのである。ところで當時の農民の生活に大きな變革をもたらしたこの五十戸一里制については、それが具體的にどのような原理に従つて設定されていたのであるか、又そのようにしてつくられた里——この里はその後靈龜元年に郷と改められた——は當時の自然村落といかなる關係にあったのかという事が當然問題となつてくるわけであるが、これらの點に關しては從來から多くの研究がなされてきているにも拘らず、⁽¹⁾まだ完全に解明しつくされてしまったとはいえないのである。私自身も嘗て「郷里制について」(史學・二六ノ一・二)という拙文においてこの問題を取上げ、主として戸令集解爲里條の諸註釋を考察の對象としつつ、里設定の方法を私なりに考えてみた。その時の私の考え方は、

要するに、五十戸一里制は大化改新から始められたものであり、五十戸毎の編戸は原則として實施されたものであるが、農民のムラの生活を全く無視して、機械的に行つたというようなものではなく、その設定についてはいくつかの除外例をつくつて、柔軟性をもたせているのであつて、その爲に農民は以前からのムラの生活を破壊されることなく、しかも新しい里制のもとでの生活を同時に行うようになったということであつた。

しかしその際いくつかの除外例の一つとして取上げた餘戸については、論證があまりにも簡單すぎたので、本稿では特に餘戸について改めて考察することとした。

一

一體餘戸については、昔からそれ自體大して大きな問題ではないというふうに考えられてきたせいか、あまり研究が盛んでないようである。ところがそれにも抱らずそれは五十戸一里制の研究において附隨的にはあるが必ずとり上げられ、しかも新に考える必要もない自明なこととして取扱はれてきているのである。しかしそれでは果して餘戸に關してはいかなる問題もなく、既に定説が出來上つていのかというと、實は必ずしもそうとはいえないのである。以下しばらく餘戸についてなされている解釋をいくつかあげてみよう。

(一)まず日本地名大辭典(平凡社)は、餘戸について詳細な考證をなし、「餘戸は、大寶令の制は或地域内の戸を五十戸づつに割りて里となし、里毎に長を置きて管理せしむ。しかし各地の戸必ずしも五十戸の倍數たる能わず、茲に殘余の戸を生ず。これを名づけて餘戸といえり」といつている。

(イ)次に米倉二郎氏は「日本の歴史地理」(新地理學講座・第七卷「歴史地理」所收)という論文において「……さて郡の中で里の區劃であるが里は地域よりもまず戸數を重視するもので、多くは自然の集落について法定戸數に近いものはそのままの位置で從來の村を里としたのであろう。しかしはなはだしく大集落である場合には、原則としてはこれを分割して新村を設定することになっていた。かような分割が實際に行はれなかった場合もあったであろうが、諸國に餘戸里などと稱される村名が今に伝えられるのは、かような村落編成に當って割り余りの法定戸數に達しないものをしばらく一里として分置したことを意味しているのであって、村落編成が強行されたことを物語っている」と述べている。

(ロ)又「日本歴史大辭典」(河出書房)の餘戸の項をひくと、「古代の村落編成の上にとられた制度。令の里の規定によれば五〇戸をもつて一里としたが、實際には残余の戸が生じるのは當然でこの五〇戸を越えた戸を餘戸といった。餘戸が一〇戸以上ならば別の里をつくり、餘戸里とよび、一〇戸以内の場合は他の大村里に付ける定であった。しかし餘戸里を事實設置したのは僻地や特別の村落についてであった。餘戸をのちに、あまるべ、あまるめなどと呼んだが今日の地名にも残っている……」とある。

(四)ところが太田亮博士の「日本上代社會組織の研究」においては、「……かの餘戸郷と云ふは五十戸未滿で、しかも十戸以上の場合に置いた郷と説明されている。けれど恐く五保の制はあったらうから、五の倍數の郷戸を有して居たと考へねばならぬ」と記されているのである。

以上餘戸に關する代表的ないくつかの記述を列記してみたが、それらをみてもわかるように、餘戸は五十戸一里制編成の際における割り余りの戸であるという點では四者共一致しているが、それがいかなる形の割り余りであるかという

點になると全く別々の考え方がなされているのである。從來自明の事と考えられている餘戸が、實は人によってさまざまの意味に解釋されているということは驚くべきことであるといわねばならない。

餘戸が里編成の際の割り余りの戸であることは間違いないであろう。しかし私はその場合でも単なる「割り余り」という表現では、前の四例は全部そうであるが、極めて不充分であり、又不正確であると思う。何故ならば、例えば(イ)の如く五十戸をこえた戸のうち十戸以上を餘戸と稱したとすれば、餘戸は全國で相當な數になることが予想されるし、何よりも人口稠密な冲積平野等で六十戸以上の大集落の多い地域では、餘戸がいくつも出来上ってしまうという不都合な結果が生じてくるからである。従って餘戸を單純に割り余りの戸というふうに考えることにまず問題があると思われるので、これを出發點として以下餘戸について若干私見をのべてみたい。

二

天平五年二月卅日の勘造日附をもつ出雲國風土記の冒頭の部分に次のような記事がある。

玖 郡	鄉、陸拾貳里一百七十八	餘戸、肆	驛家、陸	神戸、漆十一
意宇郡	鄉、壹拾壹里卅	餘戸、壹	驛家、參	神戸、參六
嶋根郡	鄉、捌里廿四	餘戸、壹	驛家、壹	
秋鹿郡	鄉、肆里十二	神戸、壹里壹		
楯縫郡	鄉、肆里十二	餘戸、壹	神戸、壹里壹	

餘戸について

安房												武藏
平野	秩父	榛澤	幡羅	大里	埼玉	横見	入間	新座	足立	豐島	都筑	愛甲
											下總	上總
佐久	小縣	荒城	土岐	山縣	父慈	行方	結城	援島	相馬	印幡	葛飴	夷濶
											陸奥	下野
色麻	賀美	宮城	伊具	標葉	菊多	名取	柴田	會津	磐瀨	鹽屋	梁田	足利
出羽												
河邊	飽海	平鹿	雄勝	最賜	牡鹿	桃生	遠田	小田	新田	膽澤	志太	玉造
但馬	丹波	丹波			丹波	越後	越中		能登	越前	若狹	
城崎	加佐	何鹿	氷上	多紀	般井	磐般	婦負	珠洲	鳳至	坂井	遠敷	出羽
											播磨	
伊豫	久米	周敷	宇摩	勝浦	佐波	玖珂	楫保	飴磨	印南	賀古	美含	

右の如く倭名抄に記載された餘戸郷を有する郡は合計九十五郡である。これは全國の郡數五百九十二郡に比較すれば約十六%で、その數は決して多いとはいえない。尤もこの場合の餘戸は平安時代まで残っていた郷名なのであつて、それ以前になくなってしまったものや、又餘戸から普通の固有の名を持つ郷に轉化した場合もあったであろうから奈良時代の餘戸はもっと多かったかも知れない。例えば出雲國の場合であるが、風土記には明らかに四箇所あったが、倭名抄には一つもない。そこで風土記の餘戸の行方を調べてみると、楯縫郡の餘戸は完全に姿を消してしまい、あとの三郡の餘戸はそれぞれ後述の如く意宇郡筑陽郷・島根郡多久郷・神戸郡伊秩郷に轉化したものと考えられる。このような移動

はまだ相當あつたと思われるが、全國の餘戸の數については倭名抄で大體の見當はつくであろう。問題はむしろ出雲國風土記にみられた一郡一餘戸という原則がここでどのようになってゐるかである。ところが倭名抄においても神戸郷の場合は二箇所以上ある郡が矢張りみられるが、餘戸郷の場合は、一つの例外もなく一郡に一箇所となつてゐる。

さてここにおいて、今や出雲國風土記及び倭名抄の記事により、餘戸は一郡に一箇所以上は設けられていないという事實を確め得たわけである。そしてそれは決して偶然ではなく、里編成に際して、そのような原則があつたと考えるべきである。私が前に問題があるとした「割り余り」ということは、だから單純な割り余りということではなく、一郡を範圍として里を編成していった、その最後の割り余りというふうに考えねばならないわけである。従つて一郡内において六十戸以上の大村がいくつかあつても、それらの十戸以上の乗戸がすべてそのまま餘戸とはされなかつたのであつて、その場合は何らかの方法で出来るだけ五十戸の里に編成してゆき、最後に残つた法定戸數以外の割り余りの戸を餘戸といったものと想像されるのである。

三

餘戸が一郡に一箇所以上設置されなかつたという事實が明らかになつたが、次に問題となつてくるのは「割り余り」というときのその具體的な内容である。今五十戸の倍數とならない殘余の戸を餘戸と名づけたという日本地名大辭典の説はさておき、米田氏と太田博士の考え方には相當なちがひがある。即ち米田氏によれば五十戸以上の大村の場合に生じた割り余りの戸が餘戸であるというのに對し、太田博士は五十戸未滿で十戸以上の場合においたものが餘戸であると説

明しているのである。それではこの割り余りの實態はどのようなものであったのであろうか。

戸令義解爲里條の冒頭に「凡戸以五十戸爲里。謂。若滿六十戸者。割十戸立一里。置長一人。其不滿十家者。隸入大村。不須別置也。……」という記事があるが、米田氏や日本歴史大辭典の説明がこの條文に基づいてなされていることは明らかである。しかし私は餘戸が六十戸以上の大村の場合にのみ設定されたということは當らないと思う。それは前にも述べた如く、もしこの考え方に基ずいて餘戸が設定されるとすれば、場所によっては一郡中に六十戸以上の大村がいくつもある場合があるのであろうから、そういう郡には餘戸が一箇所以上出來てしまうはずである、しかるに事實は一郡内には一餘戸しかないということは既に明らかにしたところである。それから又日本歴史大辭典は、餘戸は實際には僻地や特別の村落について設置されているといっているが、——それは後述する如く肯定出來るものである——もしそうであるとすれば、そのような僻地に六十戸以上の大村が⁽⁴⁾集まっているとは、一寸考えられないではないか。従つて以上の二點からいって、この令義解の解釋を基にして餘戸の説明をすることは困難であるといわねばならない。尤も餘戸を右の條文から説明する事が全く誤りであるというわけではなく、事實そのような原理に基いて餘戸が設置された場合もあったであらう。ただここで私のいいたいのは、右の條文を以て、餘戸に關する一般的説明であると思ふべきものはないということである。餘戸はそのような狭いわくのなかで作られるものではなく、その設定の原則ともいふべきものは、右の場合をも含んだものと適用範圍の廣いものであったと考えたいのである。

結論からいうと、私は五十戸未滿で十戸以上の場合に餘戸を設置したという太田博士の説に賛成するものである。博士自身はその理由については言及されていないが、私はその理由として次の三つのことがらをあげておきたいと思う。

(イ) 餘戸は郡單位の里編成にあたり、最後にあまった十戸以上の戸⁽⁶⁾を以て設置されたものであるとすれば、最後に問題となってくる乗戸は必ずしも六十戸以上の大村の場合ばかりとは限らないと思う。獨立した二十戸とか三十戸位の集落が残される場合も當然出てくるのであろう。こう考えると五十戸未満十戸以上の乗戸が餘戸になり得ると考えた方が、いかにも餘戸設置の基準として似附かわしいといえよう。

(ロ) 先に餘戸が設置された場所が問題になったが、僻地に多く立地しているとすれば、そういうところでは、五十戸未満の集落がまず普通であらうから、それはこの原則から充分に説明することが出来るであらう。

(ハ) 戸令義解爲里條の「謂。若滿_三六十戸_一者。割_三十戸_一立_三一里_一。置_三長一人_一。云々」という註釋であるが、これは普通六十戸以上の大村というふうに解釋されているが、私は必ずしもそう考えなくてもいいのではないかと思う。何故ならば、六十戸というのは、一つの集落の戸數ではなく、二つ或はそれ以上の集落の合計が、丁度五十戸で切れずに、六十戸をこえてしまった場合と考えることも出来るし、むしろその方が普通であつたと思われるからである。實際に一つの郷がいくつかの集落からなり立つている例は、播磨國風土記を繙けば明らかなように、可成り多いのである。従つて「若滿_三六十戸_一者。云々」という註釋に基づいて考えたとしても、餘戸は六十戸以上の大村の場合に設置されることになつていたとする必要はないと思う。この註釋から知られることは、要するに十戸以上の余剩の戸が出た場合には、別に一里を設けるということであつて、實際にはいろいろなケースがあり、一つの集落で十戸以上の余剩を生じる場合もあつたであらうし、又二つ或はそれ以上の集落をもつて里を編成した際に、十戸以上の余剩の戸を出した場合もあつたであらうが、兎に角それら十戸以上を以て餘戸を編成したものと思はれるのである。

なお戸令集解爲里條の諸註釋中「跡」は「跡云。所_レ乗十戸以上。別置_二里長_一。不_レ滿_二十戸_一者。寄_二附大村里_一也」とのべている。前の義解の解釋と大差ないが、ただ「跡」は特に「若滿_二六十戸_一者」とことわらずに、いきなり「所_レ乗十戸以上云々」といつているのは注意すべきことであつて、この「跡」の考え方も決して六十戸以上の大村にこだわっていないことは明瞭であらう。

以上私は餘戸とはいかなるものか、それはどのような基準に基づいて設置されたものかという點に關し、從來の諸説を比較検討しながら自分の考えを述べてみたわけであるが、しかしその所説は、何等實證されてはおらず、又それだけでは、まだ餘戸の輪廓の説明でしかない。さらに進んで餘戸の實態を出来るだけ明らかにしてゆきたいと思う。

四

先ずさき程一寸觸れた餘戸の場所について調べてみよう。出雲國風土記は國內の郡郷名及び神社名、その他の地名を、可成り詳細に、かつ正確に記載している。そこでまずこの風土記にのっている餘戸から考えてゆこう。

(一) 意宇郡の餘戸里

この里は郷里制の里で、郷の下の單位である。出雲國の餘戸里は、皆この意味の里で、五十戸一里の里ではない。さてこの餘戸里について、風土記は「郡家正東六里二百六十歩」と記している。郡家は出雲國府と一致するから、この場所、八東郡東出雲町の揖屋・意東の地で、意東川の下流、中海に沿うたところであると考えられている。そして又、この餘戸の地域内の下意東には現在筑陽神社があり、(この神社は「在神祇官」の調屋社として風土記にのっている)

又和名抄に意宇郡筑陽郷とあるから、意宇郡の餘戸里は、後に筑陽郷となったことが知れる。それは兎も角として、今この餘戸の場所を調べてみると、大體中海の海岸に面したところに設置されているということがいえるであろう。

(三) 嶋根郡の餘戸里。

これについては、郡家からの方位里程が記されていないので確かなことはいえないが、大體倭名抄の多久郷の地にあたとされている。それは風土記の餘戸は倭名抄になく、一方倭名抄の多久郷のみ風土記に記されていないからである。もしこの餘戸が、後の多久郷の地であるとすれば、同郷は鹿島町の内、旧講武村の多久川流域の地であるから、餘戸の場所も又その地域と一致する。そしてその場所は、隣接する秋鹿郡との郡界乃至はそこに近い場所ということになる。

(四) 楯縫郡の餘戸里。

これについては郡家からの方位里程もなく、又倭名抄に該當する郷もないので、その場所のはっきりしないが、普通宇賀川の上流、萬田・本庄の地に擬しているようである。もしこのとおりであるとすれば、楯縫郡の餘戸里も矢張り隣接する出雲郡との郡界に設置されていることになる。

(四) 神門郡の餘戸里。

この餘戸については、「郡家南西卅六里」と記され、又同郡の大河である神門川の記事中に、「神門川……北流 卽經_ニ來嶋波多須佐三郷_一 出_ニ神門郡餘戸里_一 門立村_一 卽經_ニ神門朝山古志等郷_一……」とあることから、神門川中流及びその支流の流域で、出雲市乙立から南方、佐田村八幡原から山口村橋波、同村佐津目に至る可成り廣い地域に位地している。さてこの餘戸は郡界に位地しているともいえるが、むしろ山間の奥地に點在する戸を集めて、設置した餘戸であるとい

出雲國の餘戸里の所在地を調べた結果は、大體以上の通りであるが、結論として、出雲國の餘戸は、主として海岸・河岸・郡界・山間僻地に設置された事が知れよう。

それでは倭名抄の餘戸郷の所在地はどうであらうか。倭名抄には既に述べたように、全國で九十五の餘戸郷が記載されているが、その場所を確めることは非常に困難である。そこで今日各地に餘戸（或は餘部・餘目）という地名が若干残っているので、さきの日本地名大辭典をたよりに、それらのうち、倭名抄の餘戸郷の名残と思われるものを拾い、その場所を調べることによって、當時の状況を推定することにした。

8	7	6	5	4	3	2	1	
	陸	信	伊		播	但	河	國
〃	奥	濃	豫	〃	磨	馬	内	名
信	宮	小	伊	飭	楫	城	錦	郡
夫	城	縣	豫	磨	保	崎	部	名
福島市 余目	仙台市 岩切	長野縣小縣郡武石村大字余里	松山市 余戸	兵庫縣飭磨郡余部村	姫路市上余部・下余部	兵庫縣城崎郡余部村	大阪府河内長野市天見	現 在 地
阿武隈川流域の平野？	七北田川流域の平野？	千曲川の上流武石川流域？	郡界	揖保郡との郡界、元漢部里 <small>(7)</small>	揖保川河口	郡界に近い山間僻地	海岸。郡界にも近し。	場 所

ここにあげたのは僅か八例にしかすぎないけれども、偶然に残った餘戸の地の大部分が、前にみた出雲國の餘戸里と餘戸について

三四九

同様に、矢張り郡界・海岸・河岸・山間僻地であることは實に興味ある事實であるといえよう。

なお出雲國風土記・倭名抄以外の古文獻・古文書にも餘戸を散見するので、ついでにそれらをも検討してみたい。ただその所在地は殆ど不明であるが、なかには一・二大體どこと推定出来るものがある。

(一) 釋日本紀卷七に引用されている伯耆國風土記逸文に「伯耆國風土記曰 相見郡 々家西北有餘戸里 有栗嶋……」とある。この相見郡は鳥取縣米子市及び西伯郡の西部地方で、郡役所は米子市車尾を遺蹟地としている。そして餘戸里が郡家の西北にあるというのであるから恐らく夜見濱の基部にあたる海岸地域ということになるであろう。

(二) 平安遣文第一卷所收の承平二年九月廿二日附の丹波國牒(二四〇)をみると

丹波國牒 東寺傳法供家衙

多紀郡大山庄預僧平秀勢豐等稻之狀

牒、衙去八月十一日牒九月九日到來傳、云々者、即問勘彼郡調物使蔭孫藤原高枝申云、余部郷專當檢校日置貞良申云、件郷本自無地、百姓口分班給在地郷々、因茲當郷調絹、爲例付徵郷々堪百姓等名、……(以下略)

とあるが、この餘部郷の地は恐らく多紀郡大山附近であるから、ここもまた隣の氷上郡との郡界である。なお右の牒文中「件郷本自無地、百姓口分班給在地郷々……」という記事は、いかにも餘戸が山間の僻地に立地していることを彷彿せしめているのではないか。

以上私はその所在地を確めうる餘戸のいろいろな例をあげたのであるが、その多くが、郡界・海岸・河岸・山間僻地に設置されているという事を今や相當な根據をもって指摘することが出来るであらう。

さて餘戸の所在地について、右に述べた如く特徴的な事實が明らかになったわけであるが、それではどうしてそういう場所に限って、餘戸が設置されたのであろうか。

私はこれは、餘戸の編成の仕方原因があるのではないかと思うのである。即ち五十戸一里の編成が郡単位で行われた際、原則として五十戸毎に編成していった、最後に十戸以上の余剰の戸が残された場合に、それを餘戸としたわけであるから、この最後の余剰戸はどうしても、右にのべたような場所になりやすかったのではあるまいか。餘戸はまさに餘戸にふさわしい立地條件を有していたというべきである。

五

次に餘戸の集團の性格について考えてゆきたい。大體餘戸には六十戸以上の大集落が分割されて、設置された場合もあったであろうが、實際はむしろ十戸以上乃至五十戸未満の單獨或は複數の集落が餘戸となったことが多かったであろう。そうすると私等は餘戸において、却って當時の自然村落の姿を垣間見ることが出来るかもしれないのである。しかしそうはいふものの、史料があまりにも僅少である爲、餘戸について具體的に考察を加えるということが極めて困難であるといわねばならない。ただ幸なことに、出雲國神門郡の餘戸里については、相當具體的なことまで明らかにすることが出来るから、この神門郡の餘戸を例にとって、以下しばらく餘戸の諸性格を考えてゆきたい。

神門郡の餘戸里の場所については、既に述べたが、それが新設されたのは、風土記によれば、他の意宇・嶋根・楯縫の三郡の餘戸と同様に、神龜四年の編戸によってであった。即ちこの年造籍が行われたのであるが、その際四郡同時に

それぞれの餘戸を郷の下の單位である里として認め、餘戸里として設置したわけである。爾來風土記勘造の年まで七年を経過したが、この餘戸について、風土記から知られることは、それ位のことである。

ところがここに偶々正倉院文書に天平十一年出雲國大稅賑給歴名帳があり、この歴名帳によって、神門部餘戸里の、その後の狀況がくわしくわかるのである。即ちまず歴名帳によれば、餘戸里は天平十一年には、餘戸でなくなり、新に伊秩郷という正式の郷に編成されている。⁽⁸⁾これは非常に興味深いことであつて、このようにはっきりと餘戸から一般の郷への轉化を確認出来る例は、恐らく他にはないであろう。

さてこの轉化の時期であるが、當然天平五年を上限とし、同十一年を下限とする數年間のうちのいずれかの年であることはいうまでもないところであるが、それをもっと正確に、天平何年と決めることは出来ないであろうか。これはしかなかなかむずかしい問題であつて、目下のところ確信をもつて何時と答えることは出来ないが、多少の考えはあるので、一寸卑見をのべておきたいと思う。

私は大體このような餘戸里から一般の郷に編成替えをするという事は、任意の年に任意に行われるというよりは、一度餘戸里が神龜四年の編戸によって新設されたように、造籍に際してなされる可能性が多いのではないかと思う。そこで出雲國風土記及び出雲國大稅賑給歴名帳の作成された前後の籍年を調べてみると、神龜四年（七二七年）、天平五年（七三三年）、天平十二年（七四〇年）⁽⁹⁾となる。このうち神龜四年は、既述の通り、餘戸里が設置された年であり、又天平十二年は、それが最早伊秩郷と改められた後になってしまふから、餘戸里から伊秩郷への轉化の年は、どうしても天平五年としなければならない。尤もそうすると天平五年（風土記勘造の年）に餘戸里が實在しているのに、その年にまた

餘戸里がなくなったというのはおかしいのではないかという疑問が當然生じてくるであろう。しかしそれは別に不思議ではないのである。なんとすれば令義解造戸籍條をみると、「凡戸籍六年一造。起_三十一月上旬。依_レ式勘造。里別爲_レ卷。惣寫_三三通。其縫皆注_三其國其郡其里其年籍_一。五月卅日内訖。云々」とあり、戸籍は、十一月上旬から翌年五月卅日まで間に作成することになっていた。従つて風土記勘造は、天平五年二月であり、造籍は、早くても同年十一月であるから、餘戸里から伊秩郷への轉化は、天平五年十一月から翌六年五月にかけて行われたと考えれば、それですむわけである。このように天平五年と考えることが、少しも無理でないとすれば、私はこの年に伊秩郷への轉化が行われた可能性が充分あるのではないかと思うのである。

次にその存續期間であるが、もし右の推定が正しいとすれば、この餘戸里は神龜四年創設の年から數えて、丁度七年間ということになる。しかしもしそうでなかったとしても、天平十一年には變つてしまっているのであるから、長くても十三年間ということになり、いずれにしてもこの期間は随分短いといえよう。そしてこれは一般に餘戸の設置期間が問題とされる場合一つの參考となるであろう。

さて神門郡の餘戸里の轉化の時期及び設置の期間については、これ位にしておくが、この餘戸里についてはまだいくつか興味ある事實を明らかにすることが出来る。

出雲國大稅賑給歴名帳は、當時賑給を加えられたところの高年者或は鰥寡惻獨にして身寄りのない者、貧窮老疾にして自存する能はざる者の名を書き上げている。その書き方は、各郷里別に戸主の姓名をあげているので、當時の村落の狀態及び氏族構成を知る上に非常に便利である。

今戸數の明らかにわかる郷名及び戸數をあげると

出雲郡漆沼郷 里三 二十一戸

〃 河内郷 里三 三十七戸

〃 出雲郷 里三 二十三戸

神門郡朝山郷 里二 二十四戸

〃 日置郷 里三 二十六戸

〃 伊秩郷 里二 十戸

となる。右の表をみてすぐわかることは、神門郡餘戸里の後身である伊秩郷以外は皆二十戸以上であるのに、この伊秩郷のみわずか十戸にすぎないということである。これはこの郷だけが偶然賑給を加えられる人が少なかったということではなく、あくまで他の郷と比較して戸の絶對數が少ないということ、即ち以前餘戸里であったからであるとしなければならぬ。もし偶然該當者が少ないというのであれば、それ以外の郷にも十戸乃至二十戸位のところがあつてもよさそうなのにそういう郷は一つもないからである。又神門郡の驛家及び神戸の戸數を見ると、伊秩郷と同様に矢張り少數で僅か四・五戸となっている事も参考となるであろう。伊秩郷が餘戸里から轉化した郷である爲、郷戸數が少なく、勿論五十戸未滿であった事はここにおいて明らかである。しかしではこの郷はどの位の戸數であつたかということになると、大稅賑給歴名帳の性質上残念ながらそれを確かめる事は不可能であるといわなければならないが、伊秩郷が坂本里及び坂奈里の二里より構成されているから、そう少數であるとは考えられない。恐らく賑給を加えられた十戸の倍の二

十戸位或はそれ以上の郷戸は有していたであらう。⁽¹⁰⁾そしてそれらは又餘戸里から轉化した直後であるから、そのまま神門郡餘戸里の大體の戸數であると考えて差支えないわけである。

次に興味ある問題は伊秩郷即ち餘戸里における氏族構成である。今この郷で賑給をうけた人の屬する戸主の姓氏をあげてみると左の通りである。⁽¹¹⁾

天平十一年出雲國大稅賑給歷名帳中神門郡伊秩郷に見える戸主名

坂本里 九戸

語部 牛麻呂 乃止志 麻呂 五戸
刀良 味乎

舍人 中麻呂 龍麻呂 二戸

舍人部 立麻呂 一戸

印色部 佐流 一戸

坂奈里 一戸

語部 井手 一戸

即ち伊秩郷では語部姓が最も多く、十戸中六戸を占めている。そこで他の郷の語部姓の戸をしらべてみると、意外なことに、出雲神門兩郡を通じて殆んどなく、僅かに

出雲郡 健部郷 波如里

語部君 一戸

餘戸について

語部 一戸

語君 一戸

出雲郡 漆沼郷 深江里

語部 一戸

神門郡 ○○郷 城村里

語部 一戸

神門郡 滑狹郷 池井里

語部 一戸

があるにすぎない。勿論これは賑給を加えられた戸だけであるから、その他に賑給を加えられない語部姓の戸がかなりあったであろう事はいうまでもない。しかしそれにしても、ただでさえ五十戸に満たない餘戸里において、かくも多く語部姓の戸が集中してあらわれている事は注目し値するといわねばなるまい。私等はここに可成りまとまった数の語部姓を名乗る集團がある事を想像することが出来るであらうし、又この事實及びその場所から考えて、神門郡の餘戸里は六十戸以上の大村が分割されて出来たものではなく、寧ろ語部姓の戸を核とする小さな自然村落が、そのまま餘戸里とされているらしいことをも推定し得るであらう。

さてもしこれが事實であるとすれば、一般的に、餘戸においても、その内部に自然村落が生かされている場合があるといつて差支えないことになる。がしかしこれは從來の餘戸に關する通念とはいささか異なる結果となり、多少問題にも

なると思うので、なおしばらくこの事に關して考察を進めてゆきたい。

神門郡の餘戸の所在地は、前に考證したように、神門川中流及びその支流の流域である。そして餘戸里は、この溪谷の平坦地に點在する戸を集めて、設置されたのである。ところでこの地域に、一つの神社があったことを風土記の記事から確認することが出来る。即ち同郡の諸神社の最後にある「不在神祇官」の波須波社がそれである。この神社は簸川郡山口村下橋、波宮部にある田中神社に當るといわれているが、波須波は橋波に通じ、又この交通不便な僻地の神社にふさわしく「不在神祇官」の社であり、又諸神社の最後に記載されている點から考えて、その推定はおそらく正しいと思う。

さてそれでは餘戸の地に社があるという事は何を意味しているのであろうか。それはとりもなおさず、この地域にこの社を中心とする自然村落があったということを物語つていゝと考へて差支えないであらう。⁽¹²⁾ただその場合この波須波社と前の語部の部落との關係が問題になってくるが、その關係の有無を實證することは困難である。或は餘戸里の地域は當相廣大なものであるから、この社附近には、別個の姓を有する小部落があったかもしれない。しかしいずれにしてもこの社が一定數のまとまった集團と結びついてゐたと考へることは、一向差支えないと思う。

ところで面白いことに、餘戸の地に神社のある例が、神門郡の餘戸以外にまだある。それは既に述べたことであるが、出雲國意宇郡の餘戸里の場合である。この餘戸も神門郡のそれと同様に、後に筑陽郷という普通の郷に變つたのであるが、この地に調屋社という「在神祇官」の社があったことが、風土記意宇郡の條に記されている。

このように餘戸の地に社があるという例をいくつか認め得るとすれば、餘戸の内に自然村落が生かされているのでは

ないかという、先の私の推論は、かなり確かなものとなってくるであろう。

さらに又この前提に立って考えるならば、神門郡の餘戸が、僅か七年乃至十三年という短期間で、伊秩郷へと轉化し得た理由も、自ら明らかになってくるのではないであろうか。もし餘戸が何らかの割り余りの、ばらばらな戸の寄せ集めであるとしたならば、そのような短期間のうちに、普通の郷に變るといふようなことは、恐らく不可能であつたであらう。

以上私は出雲國神門郡の餘戸里を例にとって、あれこれ考えてみたのであるが、今これを一應整理してみると、次のようになる。

- (1) この餘戸は山間の僻地に立地していた。
- (2) この餘戸は神龜四年編戸の時、他の三郡のそれと同時に餘戸里として新設された。
- (3) そして恐らくそれから七年後の天平五年十一月から翌六年五月にかけての造籍の時に伊秩郷と改められた。即ちその存續期間はきわめて短期間である。
- (4) この餘戸の總戸數は勿論五十戸に滿たず、出雲國大稅賑給歴名帳によると、賑給を加えられた戸は合計十戸で、他の普通の郷と比較すると約半分位である。しかし伊秩郷には二里あつた事が同歴名帳で知られるから、そう少ない數ではなく、大體二十戸或はそれ以上の戸數を有していたと思われる。
- (5) この餘戸里内の戸主の姓を調べると、他の郷と比較して、例外的に、語部姓の戸が多い。
- (6) この餘戸の地域内に、風土記の「不在神祇官」の波須波社がある。

(7) 右の(5)・(6)より、この餘戸の内には、語部姓の戸を中心とする小自然村落、或はそれ以外にも別の集團が存在して
いたらしいことが知れる。

(8) この餘戸里が非常に短期間で普通の郷に編成替えされたのは(7)の事實が前提となっていると考えられる。

六

出雲國神門郡の餘戸を取上げて、考察してきたことを、右にまとめてみたわけであるが、そこにみられた諸性格のうち
のいくつかは、又餘戸一般の性格として認める事が出来るであろう。

第一に餘戸の設置期間が短いということであるが、これは餘戸というものの中間的な性格からみて、一概にはきめら
れないことで、實際は長短まちまちであったと思うが、兎に角こういう短い場合が可成り多かったのではあるまいか。
勿論神門郡のように僅か七年乃至十三年間というのは、少し短かすぎるであろうが、案外短期間で、條件さえそろえば
一般の郷に轉化していった餘戸は相當あったであろう。

これはそう短かいとはいえないかもしれないが、例えば神龜三年の山背國愛宕郡出雲郷雲下里計帳中の戸主少初位上
出雲臣廣足の戸のところに余戸郷⁽¹³⁾が見え、又天平勝寶二年三月廿三日附の河内國石川郡紺口郷戸主山代伊美吉大山男山
代伊美吉大村についての勘籍中天平五年籍のところに餘戸郷⁽¹⁴⁾とあり、又智識優婆塞等貢進文中、天平寶字六年十二月十
六日附で貢進された私部酒主について、但馬國氣多郡餘部郷⁽¹⁵⁾の戸主私部意嶋戸口ということが見えているが、これらの
餘戸郷はいずれも倭名抄には記されていないのである。従ってそれ以前の或る時期にそれらは普通の郷として獨立した

か、或は附近の郷に吸収されてしまったものであろう。

第二にその規模であるが、これは既述したように、十戸以上五十戸未満ということになると思う。そして同じ餘戸でも、場所々々によって、この範圍内で大小のちがいが出てくるわけで、それは餘戸の表現の仕方でも、多少見當はつく。例えば右にあげた山背愛宕郡・河内國石川郡・但馬國氣多郡の餘戸は夫々郷となつてゐる。これらは早くから一人前の郷とみなされてゐるわけであり、特に山背國愛宕郡の場合は、郷里制施行中であるにも拘らず、里とされずに郷となつてゐることを考えると、その戸數はかなり多かったとしなければなるまい。ところが出雲國の餘戸は、既に明らかなるに、四郡共餘戸里となつてゐる。これは餘戸郷とするにはどうしても戸數が少なすぎるので、里とされたものである。それから又類聚三代格卷七郡司事の元慶四年三月廿六日附太政官符中に、讃岐國山田郡十郷餘戸⁽¹⁶⁾という表現がみられる。これは山田郡は十郷及び餘戸からなつてゐるという意味であらう。とすれば、これも戸數が少なく、餘戸郷としては認められなかつたものであらう。

第三に餘戸内に自然村落が存在するかどうかということであるが、私は餘戸の特別な立地條件や、一・二の實例からみて、そういう場合が相當多かつたのではないかと思つてゐる。

第四に餘戸の所在地であるが、神門郡の餘戸は、まさに山間の僻地というべきところに立地してゐた。しかしこの所在地については、既に考察したように、餘戸は普通山間の僻地のみならず、郡界・海岸・河岸のように、餘戸を編成するのに都合のいい場所が多く選ばれてゐたようである。

しかしそれはそれとして置いて、この山間僻地という點については、どうしても取上げなければならない問題がある

ので、最後にそれを考えることにしたい。それはどういふことであるかというところ、戸令義解爲里條の後半に「凡戸以五十戸爲里。……若山谷阻險。地遠人稀之處。（中略）隨便宜置謂。若滿五十戸者。依上法。立別里。若不滿者。令伍相保。附於大村也。」とあつて、五十戸一里制の除外例として、明らかに「山谷阻險。地遠人稀之處」を認めているのであるが、この「山谷阻險」の場合と、餘戸（特に山間僻地の餘戸）との關係をどのように考えたらいのかという問題なのである。この規定によれば、「山谷阻險」の場所では、もし十戸以上あれば、特別に里を編成することが出来るわけであるし、又一方山間僻地に餘戸が置かれたことも事實である。では兩者の關係をどのように説明したらよいであろうか。

まず特別の里を編成する基準について考えてみると、「山谷阻險」の所も、餘戸の場合も、同じく十戸以上ということになっている。従つて「山谷阻險」の場合は、餘戸の一種であると思ふことも出来る。そうなると、「山谷阻險」の所は、とりもなおさず「山間僻地」の餘戸であるということになるわけである。

それならば兩者は全く同じものであると考へて差支えないかというところ、私はそういいきすることは出来ないような気がするのである。確かに兩者が一致し、「山谷阻險」の場所に餘戸が置かれた場合もあったであろう。しかし「山谷阻險」の場所は、かなり強固な自然村落が古くから續いているのが普通であろうから、そういう部落に對しては、必ずしも餘戸などという名稱を新に附す必要はなく、從來からの村名をそのまま里名としても差支えないと思う。従つて兩者が一致する場合もあるであろうが、制度上では、「山谷阻險」の地は一應餘戸とは別個に考えられ、そこは單獨で、特別に一里を編成することが認められていたのではあるまいか。そしてある山間の地域を「山谷阻險」の里とするか、又餘戸とするかは、その時その場所の國郡司の決定に委ねられていたと思うのである。

むすび

以上私は餘戸についていろいろ考察を加え、多少私自身の見解をも提示してみたのであるが、多く獨斷におちいったり、又考え足りなかった點があることと思う。

又餘戸の分布についても問題があり、倭名抄によると、太宰府管内には一つの餘戸も設置されておらず、反對に陸奥國の餘戸は例外的に多い事が目につき、恐らく何か理由があるに違いないのであるが、残念ながら今の私にはよくわからないので割愛させて頂いた。併せて諸賢の御教示をお願いする次第である。

註

- (1) 石母田正氏「古代村落の二つの問題」(歴史學研究 十一ノ十・十一)
岸俊夫氏「古代村落と郷里制」、門脇禎二氏「上代の地方政治」(共に「古代社會と宗教」所收)
禰永貞三氏「奈良時代の貴族と農民」等
- (2) 例えば意宇郡には、驛戸・神戸共に三つづつ置かれている。
- (3) 例えば紀伊國名草郡には、神戸という字を附した郷が五箇所もみられる。
- (4) 一戸平均二十人として、千六百人、平均三十人とすると千八百人となり、相當な人口になる。
- (5) 例えばこれは餘戸ではなく、神戸の例であるが、倭名抄によると安房國安房郡の郷に、神戸郷と神餘郷があつたことが知れる。この神餘は加無乃安萬里と讀ませているから、これは恐らく神戸の數が五十戸をこえたので神戸郷に入りきらない十戸以上の乗戸を以て神餘郷としたものであろう。
- (6) 十戸以内はいかなる場合でも、單獨におかれることはなく、必ず大村に隸入されたことは、令義解爲里條に明らかに記されて

いる。従つて十戸以内の餘戸というものは原則として存在しなかつたと考えてよいと思う。

- (7) この現在の余部村は楫保郡との郡界にあり、昔はこの附近を山陽道が通つていた。ところが播磨國飴磨郡漢部里の條をみると、漢部里の中に多志野・阿比野・手沼川がある。そしてこのうち手沼川は、餘部の地にかさなる上手野・下手野が遺稱地とされている。従つてこの漢部里は後に餘戸郷となつたと思はれる。ところでこの場合は、餘戸から普通の郷え轉化するのではなく、逆に普通の郷から餘戸郷に變つてゐること、及び漢部の里は普通の里ではなく、風土記によれば讃岐の漢人等が移住してきたとあることなどを考えると、漢部里から餘戸郷への轉化については、何かわけがあつたと想像されるのであるが、目下のところ一寸はつきり説明出来ない。或はこれは億測であるが、この漢部里は漢人による特殊部落であつたので、その戸数も少く、又或は次第に減少していつたので、そして又年代が経つにつれて、特殊部落という意識がこの郡の役人等の間に次第にうすれてゆき、同時にこの部落の人たちの間でさえそれを喜ばないようになってきたので、終に餘戸郷に變えられたものであろうか。
- (8) 出雲國大稅賑給歴名帳には、出雲國の出雲・神門二郡にわたつて郷と里の記載があり、そのうち神門郡では、風土記記載の朝山・日置・滑狭・多伎の各郷及び狹結驛・多伎驛・神戸の名がみえてゐるが、餘戸里の名はみえない。一方歴名帳にはその他に、風土記にはない伊秩郷という新しい郷をのせてゐる。従つて神門郡の餘戸里と伊秩郷は同じものであり、天平五年二月から、同十一年までの間に、餘戸里から伊秩郷へと變つたものと想像されるのである。

なお歴名帳に神門郡多伎郷の名は直接見えてはいないが、郷名不明の里に國村里というのがあり、一方風土記に國村社の名がみえ、この社は多伎郷内の久村にある神社に擬せられてゐるので國村里は、實は多伎郷に屬してゐることが知られる。

- (9) 今宮新博士「上代の土地制度」 一四二頁

- (10) 他の郷(五十戸)で賑給を加えられてゐる郷は二十一戸―三十七戸で、大體平均すると一郷の約半数の戸が該當してゐる。そこで今伊秩郷の場合も同じ位であると考えて、該當する十戸を倍にして、伊秩郷の戸数を想定してみたわけである。

- (11) 太田亮博士「全訂^{日本}上代社會組織の研究」八〇四頁

- (12) 奥田眞啓氏「莊園前村落の構造について」(史學雜誌五八ノ三)

- (13) 寧樂遺文 上卷 一五八頁

(14) 寧樂遺文 下卷 五三六頁

(15) " " 五三二頁

(16) 倭名抄をみると山田郡の郷數は十一となつてゐる。この太政官符が出されたのは、約半世紀以前のことであるから、この時の餘戸は、倭名抄作成時には、普通の郷になつたものと思われる。